

ジェンダー・フリーについてのしろうと理論^{1,2,3}

青野篤子

福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：ジェンダー，ジェンダー・フリー，ジェンダー・フリー・バッシング

はじめに

日本でも、第二次フェミニズムの影響を受けて、女性の地位向上をめざした取り組みは徐々に進んできたと言えるだろう。社会における男女平等を実現するためには幼児期からの教育が必要であるとの認識も強まり、1990年代には教育における男女平等を推進しようという動きが徐々に起こってきた（青野，2000）。「ジェンダー・フリー」ということばもそのような機運の中から作り出された一種の和製英語である（山口，2006）。「ジェンダー・フリー」ということばは、1995年に、東京女性財団が製作した教師向けガイドブック「若い世代の教師のために——あなたのクラスはジェンダー・フリー？——」（東京女性財団，1995）の普及を機に広く知られるようになった。「性差別撤廃」や「男女平等」より軽い響きがあり、このことばを口にすれば問題が解決するかのよう希望を人々に与えたのも確かであろう。このガイドブックは、教育現場に根強く残っている男女の区別や教師の男女別の働きかけ（隠れたカリキュラム）を点検することを推奨しており、いわば「ジェンダー・チェック」のためのガイドラインとなるものであった。これが男女平等教育を推進するための第一歩として必要な作業であったことは間違いないとしても、このような取り組みが広がるにつれ、教育機関や保育所に対してジェンダー・チェックを行い、「男女を同じにする」ように指導することがジェンダー・フリー教育なのだという印象を植え付けたであろうことも容易に推測されるのである（金子・青野，2006）。

事実、第二次フェミニズムに対するバックラッシュを背景に、小泉・安部内閣のもとで重用された男女平等反対派によって、ジェンダー・フリー・バッシングが強硬に推進された。バッシング派は、ジェンダー・フリー教育は、トイレや着替えや体操競技などにおいて生物学的な差異や個人々の希望を無視して男女を画一的に扱うものであること、さらに女らしさや男らしさを否定するものであると批判する。バッシング派は、学校での男女同室着替えや性教育などを直接の攻撃対象とし、政府にも圧力をかけた。これを受けて、2005年に第二次男女共同参画基本計画が閣議決定された際に、「社会的・文化的に形成された性別（ジェンダー）の表現等についての整理」という文書において、「『ジェンダー・フリー』という用語を使用して、性差を否定したり、男らしさ、女らしさや男女の区別をなくして人間の中性化を目指すこと、また、家族やひな祭り等の伝統文化を否定することは、国民が求める男女共同参画とは異なる」とした上で、この用語をめぐる誤解や混乱を解消するため地方公共団体においても今後は使用しないことが適切であると通知した。また、この通知はジェンダー概念についても言及しており、「ジェンダーという用語は価値中立であり、性差や女らしさ・男らしさを否定するものでない」と明記している。この通知の直後、ある地域では、ジェンダー関連書籍の排除事件や、ジェンダー論の講座の中止事件などが起こっている（木村，2006；日本女性学会ジェンダー研究会，2006；上野ら，2006；若桑・加藤・皆川・赤石，2006）。しかし、ジェンダー・フリー・バッシングは単なる隠れ蓑であり、愛国心の醸成、家庭基盤の充実、母性・父性の復権などをめざした保守反動勢力の根強い運動が背景にあることを忘れてはならな

¹ 本調査は、平成18～20年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)（課題番号：18410240）の助成を得て実施された研究の一部である。

² 調査に協力いただいた園関係者の方々に感謝の意を表します。

³ 本研究の一部は、日本心理学会第71回大会で発表された。

い。

一方で、一部ではあるが、ジェンダー・フリーの名のもとで、保育環境のジェンダー・バイアスを是正し、ジェンダーにとらわれない保育をめざす幅広い運動や取り組みが続けられ（0歳からのジェンダー教育推進事業、千葉県松戸市の「ふりーせる保育」など）、2000年頃には、ジェンダー・フリー教育の実践も報告された（山梨県立女子短大ジェンダー研究プロジェクト、2003など）。しかし、現実には、日本社会の男女平等は遅々として進まず、教育現場においても男女平等が達成されていないことから、ジェンダー・フリー・バッシングはまったく不当なものであるが、このような逆風のなかで、先進的な取り組みをしていたところは後退を余儀なくされ、教育現場はジェンダー・フリー教育に対して消極的にならざるを得ないのではなかろうか。

このようなバッシングの動きを受けて、学者の間でもジェンダー（・フリー）をめぐる様々な議論がなされるようになったが（イダ、2007；竹信、2006；若桑、2006；山口、2006）、バッシング派への対抗勢力にならず、一般社会への有効な提言にもなっていないと思われる。バッシング派が「ジェンダー・フリーは性別や性差を否定する過激な思想である」と主張すれば、擁護派は「ジェンダー・フリーは男女を中性化したり、性別や性差を否定するものではない」と反論することにより、ジェンダー概念の社会構築性を否定するかのようなニュアンスを伝えてしまっている。あるいは、フェミニストの中には、ジェンダー・フリーはそもそも学術用語でもなく、フェミニズムを進めるためのことばとしても適切とは言えないという意見を述べる人もいて（山口、2006）、これまでのジェンダー・フリー教育の実績さえも疑問視される傾向も生み出されている。また、日本学術会議学術とジェンダー委員会（2006）は、こういったことば狩りや学問に対する政治的介入に抵抗すべく、「提言：ジェンダー視点が拓く学術と社会の未来」を発表したが、ジェンダーはあくまでも分析概念であり、良い悪いの価値判断を含まないという立場を鮮明にした。これは、ジェンダーは視点であり、男女の不均衡な関係や性差別などの実体を表すことばではないことを意味しており、ジェンダー概念の無力化を促すことになる。

ところで、伊田（2006）も述べているように、ジェンダー・フリーの語源や学術用語としての意義はともかく、ジェンダー・フリーの名のもとで進められた教育実践が、ジェンダーの解消と男女平等を求めた運動であり、教育現場や一般の人々にある程度のコンセンサスが得られているならば、廃止すべきではなく、むしろ一層の普及と理解をめざすべきではないだろうか。また、ジェンダー・フリー・バッシングは、実はジェンダーという用語を排斥しようというジェンダー・バッシングであることを見落としてはいけない。バッシング派が、性差を尊重しなければいけないと主張するとき、生物学的な性差のみならず女らしさや男らしさのような社会的性差（ジェンダー）も含めているからである。宇井（2005）は、人々が用いる男女平等の判断基準の一つに「男女の特性の原理」があるとしているが、バッシング派はまさにこれを適用しているのである。そこで、バッシングの対象は実はジェンダー概念そのものであるということになる。

「ジェンダー」はあらゆる学問分野で重要な概念となりつつある。しかし、ジェンダー概念が、性現象の観察とフェミニズム思想や認識論の両方を背景にしていることから、学者の間でも定義は一貫せず、ジェンダー概念を複雑にしているように思われる（青野、印刷中）。また、伊田（2007）も述べているように、バッシングによってあらわになったジェンダー（・フリー）概念の揺らぎは、実はこれまで潜在的にあった問題点が顕在化してきたと言えるだろう。今後、ジェンダー概念の使用に対する自己規制やジェンダー・フリー教育の後退が懸念されるが、このことばが現場や一般の人々（しろうと）にどのように理解されているのかにかかっているのではないだろうか。ジェンダー概念は「しろうと（一般の人々）」にはわかりにくい難解な概念だという思い込みが「くろうと（学者）」に存在する。しかし、「くろうと（学者）」が論争のための論争を繰り返して袋小路に迷いこんでいるのに対して、むしろ「しろうと（一般の人々）」はジェンダー（・フリー）概念の本質をつかみとり、自分なりに理解しているのではないだろうか。通常「しろうと理論（lay theory）」ということばは、科学的に検証されていないが一般には因果判断に用いられている考え方を意味するとされ、個人的な狭い経験から作られた主観的なものであること、例外を認めない単純な理解であることなどが特徴とされ、ややもすると否定的なニュアンスを

与えがちなことばである (Furnham, 1988 細江達郎監訳 1992)。しかし、ここでは、学術用語・専門用語としてのジェンダー概念が一般社会にどのような形で流布しているのか、人々の意識や認識の内容という意味で用いる。

以上のことをふまえ、本研究は、ジェンダー・フリー論議の対象となっている、ジェンダー（・フリー）概念のとらえ方、性差のとらえ方、性区分の是非、伝統行事の是非について一般の人々の意識を探ることを目的として行われた。保育者の意識調査 (青野, 2007) に続き、本稿では保護者対象の意識調査の結果を報告する。

方法

調査対象と調査方法 2006年9月に、福山市内の法人立の幼稚園2園、保育所5園の保育者と保護者に郵送留め置きにて質問紙調査 (保育者・保護者共通) を実施した。これらは、あらかじめ園長に対して研究のための観察やデータ収集の協力を依頼し、質問紙調査への協力が得られた園であった。幼稚園1園、保育園1園は園の都合で保護者は1クラスのみの実施となったが、その他は全クラスで実施した。各園に申し出のあった部数の調査票を郵送し、園長から保育者・保護者に調査の依頼をしてもらい、約2週間を限度に回収をお願いした。その後園単位でまとめて返送してもらった。その結果、保育者94名、保護者428名から回答が得られた。回収率は全体で62.1%であった。保護者のうち母親以外からの回答は非常に少なく、比較に耐えうる数ではなかったため、今回は母親のみの393名 (平均年齢34.1歳, SD4.7歳) を分析対象とした。

調査内容 調査は、「保育・幼児教育と男女共同参画に関する意識調査」という名目で、幼児期の性差について、男女のしつけについて、男女の特性について、園の方針や実態について、男性保育者の参入についてなどの質問に加えて、ジェンダー（・フリー）に関連した事柄について回答を求めた。調査票には、「男女共同参画社会の実現は21世紀の最重要課題とされており、家庭や学校にも期待が寄せられているが、男女平等の教育をめぐる様々な意見が対立していることから、この調査は、直接保育にかかわる保育者や保護者の意見を聞くことを目的としている」こと、また、調査主体は研究者であり、園が実施するものではないことを明記した。本稿では、ジェンダー・フリー論争にとくに関係があると考えられる4つの質問に絞って結果を報告する。それは以下のようなものである。①ジェンダーということばを聞いたことがあるか、あるとすればどのような意味だと考えているか。②ジェンダー・フリーということばを聞いたことがあるか、あるとすればどのような意味だと考えているか。③「女らしさ・男らしさ」は生まれつきのものか、社会的に決められたものか。④ひな祭りや鯉のぼりの行事を園で行うことについては賛否両論があるが、あなた自身はどう思うか。(前置きをしたのは、正しい答えがあるわけでないことを強調するためである。) ⑤園における男女同室での着替えやトイレの使用についてどう思うか。

結果

ジェンダーということばについて

ジェンダーということばを聞いたことがあるかどうかを、「ある」、「ない」の2件法でたずねた結果は、「ある」が103名 (26.2%)、「ない」が280名 (71.2%)、無回答が10名 (2.5%) であった。このことから、ジェンダーということばは保護者にはそれほど広く浸透していないと言える。ついで、「ある」という回答をした人に対して、ジェンダーということばの意味について具体的な記述を求めたところ、わからない (意味は考えたことがない) という人が8名いたが、91名から回答が得られた。得られた回答の種類から、「単なる性差・性別」としてとらえているもの、「社会文化的に形成された性差」としてとらえているもの、社会的役割の一つである「ジェンダー・ロール」ととらえているもの、「性差別」や「性的不平等」など社会システムとしてとらえているもの、意味を取

表1 ジェンダーということばの意味

回答の種類	具体的な回答
単なる性差・性別	「性差」, 「男女差」, 「性」, 「性別」 など (33名)
社会文化的性差	「文化的・社会的な性差」, 「文化的・社会的な男女の違い」, 「女らしさ・男らしさ」, 「つくられた性差」 など (27名)
ジェンダー・ロール	「男らしさ・女らしさの決めつけ (定説, 固定観念)」, 「男女の役割」, 「役割としての性」 など (12名)
性差別・性的不平等	「性差別」, 「性別による差別」, 「社会的性差に対する偏見」, 「性別に関する問題のすべて」, 「性差による扱いの違いや不平等」 など (9名)
誤解・その他	「男女に関わらず人間としてどうか」, 「成長・発達段階」, 「倫理の第一人者」, 「心の性」, 「男女の差別をなくす」, 「女性の特性」, 「何でも男女平等は疑問」 など (10名)

り違えているものの、5つに分類した。その結果を表1に示している。

もっとも多いのが、「性差」, 「性別」 など、とくに社会的な意味を含めていないものが33名あった。次に多いのが、「文化的・社会的な性差」, 「女らしさ・男らしさ」 など、社会の中でつくられた男女の意味、あるいは社会的な影響のもとで生じた男女の差とみなすもので、27名であった。次に多いのが、「男らしさ・女らしさの決めつけ」, 「男女の役割」 など、社会規範や社会的役割とみなすものであり、12名から回答があった。さらに、「性差別」, 「性差による違いや不平等」 などのように、社会システムとしてのとらえ方も見られた(9名)。また、ジェンダー・フリーとの混同や、心の性や人名など、意味の取り違えが10名あった。およそ4分の1の人がこのことばを聞いたことがあり、その大半がジェンダーを社会的につくられた性として理解している。そしてその一部の人は、ジェンダーが性差別や性的不平等の側面をもつことも認識している。

ジェンダー・フリーということばについて

ジェンダー・フリーということばを聞いたことがあるかどうかを2件法でたずねた結果、聞いたことがある人が75名(19.1%)、聞いたことがない人が285名(72.5%)、無回答が33名(8.48%)であった。聞いたことがある人に対して、ことばの意味を具体的に記述してもらった。無回答、わからない、あいまいな回答を合わせた8名を除く67名の具体

表2 ジェンダー・フリーということばの意味

回答の種類	具体的な回答
男女の区別をしないこと	「男女という枠から自由になる」, 「性別で区別しない」, 「性差にとらわれない」, 「男女の差がない」, 「性別や性差のない」, 「性差をなくそうとする動き」, 「社会的な性差をなくそうとすること」, 「性差のない社会」, 「性差なく一人の人間としてかわる」 など (22名)
個性を尊重	「性別より個性を尊重」, 「自分らしく生きること」, 「男女の役割を離れて個人の在り方を自由に選択できるという考え」, 「性にとらわれず能力・個性にあった行いをする」 など (10名)
ジェンダー・ロールから自由であること	「性別の違いにとらわれない行動や考え方」, 「社会的性役割をおしつけないこと」, 「男女の枠にとらわれず自由にする」, 「男女の固定観念をなくす」, 「社会的性別という枠からの離脱」 など (17名)
男女平等	「男女平等であること」, 「男女の役割分担が当たり前の世の中を変えようとする運動, 思想」, 「男女平等社会」, 「性差別のない社会」, 「男性らしさ・女性らしさを否定的にとらえる考え方」, 「男女共同参画」 など (18名)

的な回答内容を表2に整理した。回答は多岐にわたっているが、その意味内容から、「男女を区別しないこと」、「個性を尊重」、「ジェンダー・ロールから自由であること」、「男女平等」の4種類に分類した。もっとも多いのが「男女の区別をしないこと」で、22名の回答がこれに属する。保護者の中のかなりの人が、ジェンダー・フリーを男女の区別をせず男女の差異をなくすものだと解釈している。しかし、次に多いのが「男女平等」を表わす内容で18名がこれに含まれる。これらは、「性差別のない社会」、「男女共同参画」など、個人の在り方ではなく社会システムの変革に言及したものである。これとほぼ同数の回答があったのが「ジェンダー・ロールから自由であること」で、17名の回答がこれにあたる。もっとも少なかったのが「個性の尊重」で、10名であった。これには、性別より個人の能力や個性を重視すること、自分らしく生きることを重視した考え方が含まれる。

女らしさ・男らしさについて

「女らしさ・男らしさ」が得得的なものか、社会的に形成されたものか、あるいはその両方を含むものかをたずねるものであった。「生まれつきの男女の違いから自然に現れてくるもの」を選んだのが242名(61.6%)でもっとも多く、「女性・男性にふさわしいこととして、社会的に決められたもの」を選んだ人が22名(5.6%)、「両方を含むもの」を選んだのが114名(29.0%)であった。その他の回答として、性別の固定概念、社会の都合で決められたもの、親の育て方・接し方で現れるもの、しつけ・マナーとして必要なもの、それぞれの個性や特性、などがあつた。ジェンダーについての知識が女らしさ・男らしさの認識に影響を与えているかどうかを検討するため、ジェンダーということばを聞いたことがある人とそうでない人の中で各回答の比率を比較したところ、聞いたことがある人の方で、「社会的に決められたもの」、「両方を含むもの」の比率が高かつた($\chi^2=10.02$, $df=3$, $p<.05$)。ただし、ジェンダー・フリーに関しては有意な差は認められなかつた。

ひな祭りや鯉のぼりの行事について

園で行うひな祭りや鯉のぼりの行事について、調査対象者の考えのもっとも近いものを選んでもらった結果、「伝統文化として大切にすべき」が199名(50.6%)、「男女が同じように参加する行事として行えばよい」が115名(29.3%)と、肯定的意見が大半を占めた。一方、「男女差や男女の役割を強調するのではよくない」を選んだ人は皆無であつた。伝統も踏襲しながら、男女平等の観点も大切にすると考える人がかなりいることがわかる。「その他」への自由回答としては、季節感を身につけさせる意味がある、伝統を受け継ぐと同時にその背後にある負の意味も理解させることが重要、国際社会の中の日本を理解する上で伝統行事は重要、などの意見があつた。ジェンダーやジェンダー・フリーということばを聞いたことがある人とそうでない人とで有意差は見られなかつた。

男女同室での着替えやトイレの使用について

園における男女同室での着替えやトイレの使用についてどう思うかについて選択肢から選んでもらつた結果、「幼児期は男女差がほとんどないので一緒でかまわない」が199名(50.6%)でもっとも多く、「男女差に気づかせる意味でも幼児期は一緒の方がよい」が122名(31.0%)、「幼児期でも個人差があるので、できれば男女別にすべき」が40名(10.2%)であつた。幼児期に限って言えば、保護者には同室を否定する意見より肯定する意見の方が多しと言えよう。「その他」への自由回答として、男女が仲良く行動することを優先するためには一緒がよい、個人差が大きいので個々に対応すべき、年少は一緒でよいが年長は別がよい、着替えは一緒でよいがトイレ

表3 女らしさ・男らしさをどう考えるか

	社会的につくられたもの	生まれつきの違いから	両方を含む	その他
聞いたことがある	10 (9.7%)	52 (50.5%)	37 (35.9%)	4 (3.9%)
聞いたことがない	12 (4.4%)	183 (66.5%)	75 (27.3%)	5 (1.8%)
全体	22 (5.8%)	235 (62.2%)	112 (29.6%)	9 (2.4%)

は別がよい、女兒の体つきの変化による、園の方針にまかせる、家庭の考えにもよる、などの意見があった。ジェンダーやジェンダー・フリーということばを聞いたことがある人とそうでない人で有意差は見られなかった。

考察

本研究は、ジェンダー（・フリー）についての人々の意識を把握する目的で行われた。幼稚園・保育所の母親に対する質問紙調査を実施した結果、以下のような知見を得ることができた。①ジェンダー（・フリー）の認知度は高くないが、知っている人の半数以上は、社会的構築性を理解している。②ジェンダー（・フリー）の知識は性差のとらえ方に影響を与える。③ジェンダーと伝統文化を切り離して考えている。④少なくとも幼児期の男女同室に反対は少ない。

まず、ジェンダーということばを聞いたことがあるのは3割に満たない状況であり、認知度は高いと言えない。しかし、そのことばを聞いたことがある人の過半数が、ジェンダーは社会的に形成されたもの、あるいは社会的に規定された役割であると考えていた。また、1割の人は、ジェンダーを、性差別や不平等など、社会システム（社会のありかた）としてとらえていた。ジェンダーということばの意味や定義は学者によっても異なり、とくに生物学的性（セックス）との関係については議論が多い（青野、印刷中）。そのためにジェンダー概念が難解でしろうとに理解しにくい印象を与えるのであるが、保護者はジェンダーの社会構築性を理解していると言える。ただし、同時に実施された保育者対象の調査（青野、2007）と比較すると、単なる性差と回答した人の比率が保護者の方で高い。保育者は、保育の専門家としてジェンダーについての学習の機会があったかもしれないし、日頃の保育の中でジェンダーにまつわる生きた経験がなされているのかもしれない。

今後より広く一般の人々にジェンダー概念を普及させていく際に、ジェンダーの社会構築性を伝える必要がある。青野（2004）は、セックスを、個人の内部にあって、個人の性の形成を推し進める要因（染色体・遺伝子・ホルモン、それらの作用の結果としての解剖学的構造）、ジェンダーを、個人の外にあって個人の性の形成を推し進める要因（女性と男性にまつわる社会的・文化的な取り決め）として区別し、セックス（S）とジェンダー（G）の2つの要因が人間の性を形成すると考えている。図1に示しているように、元来ジェンダー（G）は個

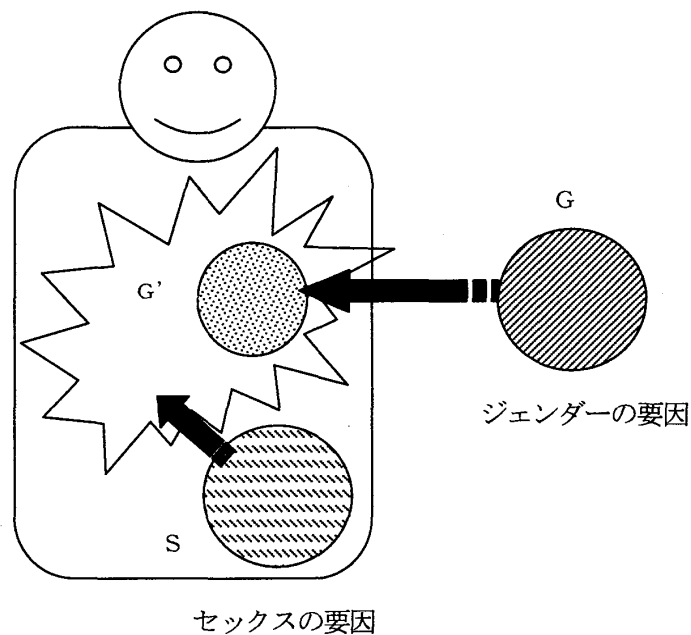


図1 人間の性を形成するセックスとジェンダーの要因

人の外にあるが、個人がそれを中にとりこんで（ジェンダー化して）G' となるのである。このような説明が有効ではないかと考えられる。

ジェンダー・フリーということばの認知度も2割に満たない状況であり、バッシングが起こっているにしては一般の人々の関心は薄いと思われる。しかし、このことばを聞いたことがある人の過半数が、単に性差がない状態や男女の区別をなくすという解釈を超えて、社会的な構成物としてのジェンダー・ロールの解消、男女平等の実現をイメージしている。すなわち、前述のジェンダー概念の理解と即応する形で、ジェンダー・フリーも正しく理解されている。また、理解される概念だと言えよう。ただし、ジェンダー概念と同様に、保護者よりも保育者の方で理解が進んでいるという点も指摘しておく必要があるだろう（青野, 2007）。また、字義通り解釈すればジェンダー・フリーはジェンダーから自由という意味であるが、すでにつくられた性差を見直したり男女の不得意な分野を伸ばさせるための積極的な働きかけを含むと考えられる。このようなとらえ方は、保育者にも保護者にもほとんど見られなかったことから、一層理解を促していく必要がある。

ことばは認識の枠組みを提供するものである。ジェンダー（・フリー）ということばを知ることにより、女性と男性のみでくれの違だけでなく、その不均衡な関係、とりわけ、女性に対する差別に容易に気づくことができる。ジェンダーということばを聞いたことがある人は、女らしさ・男らしさの起源についてより社会的な要因を重視するようになるという結果は、このことを示している。そして、ジェンダーがもたらした不公平や不平等と闘う力を得ることができるのである。ジェンダーは単に現象的な性差や性現象を表すことばでもなく、単に研究や学問のための視点でも分析概念でもなく、権力構造や支配関係そのものなのである。本研究から、生活者であるしろうと間にこそ、分析概念を超えた理解が広がる可能性が示唆されたと言えよう。

伝統行事には確かに女性を排除するものや、女性性や男性性を強調するものが少なくない。そういう意味では、伝統や文化すべてがジェンダー「文化」を継承するという機能をもっていると言えよう。しかし、一方で、伝統行事や文化を伝承する営みにおいて、人類の遺産を受け継ぐこと、人々が集いつながり協同することの意味もあるだろう。本研究から、保護者は伝統行事を肯定的に評価していることがわかった。ただし、男女が同じように参加することが望ましいと考える保護者も少なくなかった。この傾向は、保育者の結果と同じである（青野, 2007）。このことから、人々は、女性差別につながるジェンダーと文化の伝承という問題を切り離して考えていると言えるだろう。また、保護者の自由回答にもあったように、伝統行事がもつ「負の意味」を子どもたちに伝えていく意味も小さくないと思われる。

最後に、同室での着替えやトイレ使用の問題であるが、バッシング派と擁護派の間の喧々譁々の議論をよそに、保護者はかなりおおらかな考えをもっていると言える。男女差がほとんどない段階では一緒によいという意見がおよそ半数を占め、男女差に気づかせる意味でも一緒によいが約3割であった。逆に、個人差にも配慮してできれば別がよいという回答は約1割であった。そして、この比率は保育者調査の結果とほぼ同じである。2006年に文部科学省は都道府県教育委員会を通じて小学校などでは男女別々にするように指導したが、幼稚園や保育所への影響もあるだろう。ここで、子どもの保育に直接あたっている保育者や保護者のしろうとの感覚というものが大切にされるべきだと思う。

本研究の結果から、結論として、ジェンダー（・フリー）はしろうと（一般の人々）にも理解可能な概念であり、正しく理解されていることから、より一層ジェンダー（・フリー）概念の理解を促す必要があると考えられる。

引用文献

青野篤子 (2000). フェミニズムと教育 児童心理学の進歩 2000年版, 金子書房 pp.124-147.

青野篤子 (2004). 「女性」とは? 「男性」とは? ジェンダーの心理学 改訂版 ミネルヴァ書房 pp.1-24.

- 青野篤子 (2007). 男女平等とジェンダーに対する保育者の意識 福山大学人間文化学部紀要, 7, 65-79.
- 青野篤子 (印刷中). ジェンダー概念の変遷 青野篤子・赤澤淳子・松並知子 (編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版
- Furnham, A. 1988 *Lay theories: Everyday understanding of problems in the social sciences*. Elmsford, New York: Pergamon Press. (細江達郎 (監訳) 1992 しろうと理論: 日常性の社会心理学 北大路書房)
- 伊田広行 (2006). フェミニストの一部がどうしてジェンダー・フリー概念を避けるのか 若桑みどり・加藤秀一・皆川満寿美・赤石千衣子 (編著) 「ジェンダー」の危機を超える! ——徹底討論! バックラッシュ—— 青弓社 pp.237-245.
- イダヒロユキ (2007). 「ジェンダー概念の整理」の進展と課題(1) 人間科学研究 (大阪経済大学人間科学部), 1, 49-69.
- 金子省子・青野篤子 (2006). ジェンダー・フリー保育に及ぼす保育者・親のジェンダー観の影響 平成15年度～17年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) (研究代表者: 金子省子)
- 木村涼子 (編) (2006). ジェンダー・フリー・トラブル 白澤社
- 日本女性学会ジェンダー研究会 (2006). 男女共同参画/ジェンダーフリー・バッシング——バックラッシュへの徹底反論——
- 日本学術会議学術とジェンダー委員会 (2006). 対外報告 提言: ジェンダー視点が拓く学術と社会の未来
- 竹信三恵子 (2006). やっぱりこわい? ジェンダー・フリー・バッシング 木村涼子 (編) ジェンダー・フリー・トラブル 白澤社 pp.19-34.
- 東京女性財団 (1995) 若い世代の教師のために——あなたのクラスはジェンダー・フリー?——
- 上野千鶴子他 (2006). バックラッシュ! ——なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?—— 双風社
- 宇井美代子 (2005). 女子大学生における男女平等の判断基準——職場・家事・育児場面における違い—— 社会心理学研究, 21, 91-101.
- 若桑みどり (2006). バックラッシュの流れ 若桑みどり・加藤秀一・皆川満寿美・赤石千衣子 (編著) 「ジェンダー」の危機を超える! ——徹底討論! バックラッシュ—— 青弓社 pp.83-123.
- 若桑みどり・加藤秀一・皆川満寿美・赤石千衣子 (編著) (2006). 「ジェンダー」の危機を超える! ——徹底討論! バックラッシュ—— 青弓社
- 山口智美 (2006). 「ジェンダー・フリー」論争とフェミニズム運動の失われた10年 上野千鶴子他 バックラッシュ! ——なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?—— 双風社 pp.244-282.
- 山梨県立女子短大ジェンダー研究プロジェクト・私らしく、あなたらしく*やまなし (2003). 0歳からのジェンダー・フリー 生活思想社

Lay theories on gender free

Atsuko Aono

The purpose of this study was to research parents' understanding of the concepts of "gender" and "gender free", the attitudes towards gender-related traits and the treatment of girls and boys without distinction of sex. Three hundred ninety-three mothers' data were analyzed (responses from fathers were very few). The results were as follows: 1) The number of mothers who knew the words "gender" or "gender free" was not very high, but they understood the connotation of social constructedness. 2) Their knowledge of the words affected how they thought about the origins of gender differences. 3) Many mothers' thought traditional activities like girls' and boys' festivals were important as cultural perpetrators, but interchangeable with regards to sex.. 4) Few mothers opposed the use of co-ed changing rooms or toilets for children. Therefore, it is believed that the concepts of "gender" or "gender free" are understandable to the general public and need to be popularized.